

竹中氏陣屋跡(県史跡)(岩手城, 竹中陣屋, 竹中半兵衛陣屋, 岩手陣屋)

(不破郡垂井町岩手)(岩手小学校)

竹中氏陣屋(たけなかしじんや)は、岐阜県不破郡垂井町(美濃国不破郡岩手)にあった江戸時代の陣屋。安土桃山時代には岩手城と呼ばれていたが、江戸時代に竹中氏が旗本身分に留まったため城は陣屋と呼ばれるようになった。別名、竹中陣屋、岩手陣屋。

羽柴秀吉(豊臣秀吉)の軍師(参謀)であった竹中重治の子である竹中重門が築いたものであるが、敷地を囲む大規模な堀(水堀等)と石垣などがあり、世に言う陣屋というものより小型の城と言ったほうが正しい。

元々、竹中氏の居城は堅固な山城である菩提山城(岩手山城)であったが、平時には不便なことから、麓に岩手城を築いたという。

現在その跡地は岩手小学校と民有地となっているが、白壁の櫓門、水堀の一部、石垣の一部が残っている。また入り口付近に竹中重治の像が建てられている。判りにくいが、櫓門から北側へも道沿いの家の裏手に土塁が続いていて、岩手小学校裏、西側へと続いている。

1956年(昭和31年)に、岐阜県指定史跡となっている^[1]。

竹中氏とは

平良文(たいらのよしふみ)を祖とする武門の名家鎌倉氏の一族である。竹中氏は、鎌倉景政の孫長江義景から始まる長江氏の支族岩手氏より始まるとされる。ただし美濃守護土岐家と猶子などの姻戚関係となったものと思われ戦国時代以降は源氏庶流を称す。

概要

重元流竹中氏

1588年(天正16年)、竹中重門が菩提山城の山麓に岩手城を築く。尚、築いた時期は、文禄から慶長年間の頃の説もある。

1600年(慶長5年)、関ヶ原の戦いにて、竹中重門は当初西軍につき、犬山城城主石川貞清に協力。稲葉貞通、稲葉典通、加藤貞泰、関一政らと犬山城に籠城する。しかし、井伊直政の仲立ちにより東軍に加わり、黒田長政軍として参戦する。関ヶ原の戦いは竹中氏の領土も戦場となったことなどから、徳川家康より1,000石の米を下賜され、また、所領(不破郡岩手 6,000石)を安堵された。旗本として徳川将軍家に仕え、よって岩手城は以後、岩手陣屋と呼ばれることとなる。

竹中氏は旗本交代寄合として幕末まで存続して、幕末期の当主であった竹中重固は江戸幕府陸軍奉行に任じられるが、1868年(明治元年)の鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の指揮官として新政府軍と交戦したため、朝敵として討伐対象となり、岩手陣屋は没収された。重固はその後、戊辰戦争で旧幕府軍の一員として箱館戦争まで戦い抜き、その結果竹中氏は6,000石からわずか300石に減封されて交代寄合の地位を失った。

重光流竹中氏

重光の長子である竹中重利は羽柴秀吉より美濃で3,000石の所領を賜い宗家から独立した。のちに領地替えとなり豊後高田で13,000石の大名となった。さらに関ヶ原の戦いにおいて徳川家康についた功により豊後の大分城を与えられ2万石の大名となるが、子の竹中重義は長崎奉行に任命されるも、密貿易の罪で幕府より切腹を命じられ、改易となった。

重光の次子である竹中重定も羽柴秀吉に仕える。また、豊臣二世関白となる羽柴秀次の側室に、娘が上がり「羽柴土丸」を産む。関ヶ原の戦い以後は徳川家に仕え、摂津吹田を領する上級旗本として続いた。鷹司家(松平家)とも姻戚関係だった。

Wikipediaによる

